

# 南部徳洲会病院

症例番号6

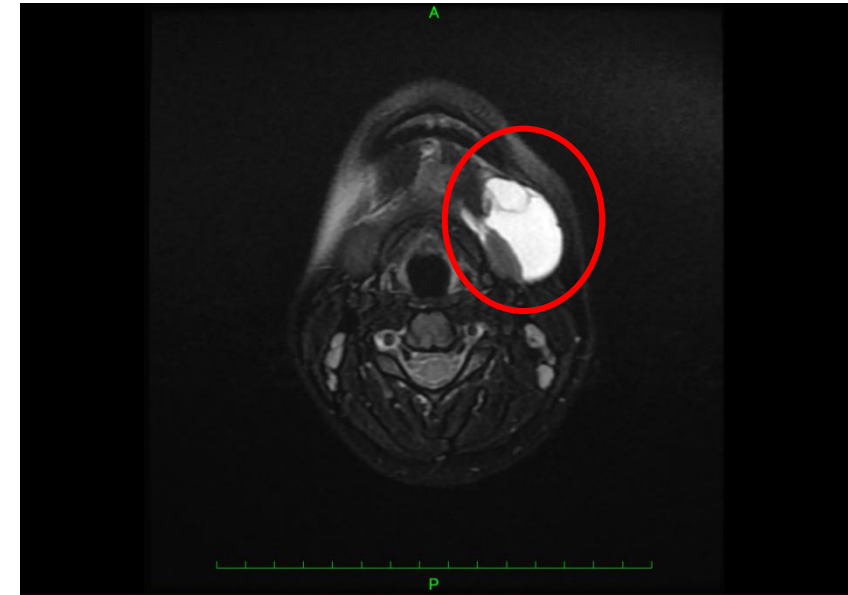
## 1、細胞診判定：Class III

Atypia of undetermined significance(意義不明な異型)

多数の好中球とマクロファージ、粘液がみられ、軽度の核異型を呈する紡錘形細胞が少数みられます。肉芽を伴う反応性異型の可能性を考えますが、粘液嚢胞（ガマ腫）の可能性も考えられます。悪性の可能性も完全には否定できないため上記判定としました。

MR I 画像診断においても粘液嚢胞（ガマ腫）が疑われ、他院へ紹介となり腫瘍切除術が行われた。

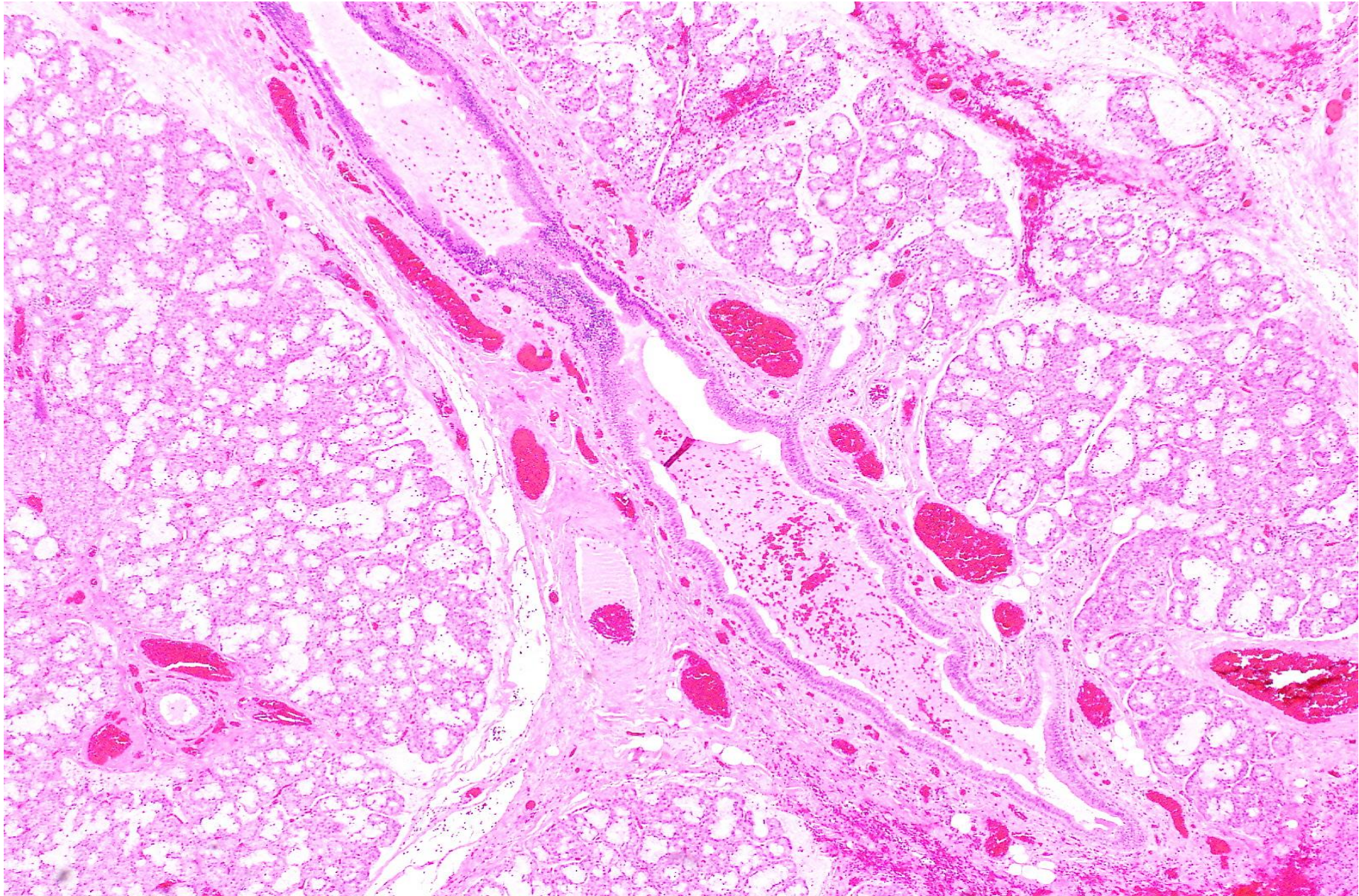
## 2、組織診断：Compatible with ranula, sublingual gland, excision.



舌下腺周囲～顎下腺周囲にT1低信号、T2高信号の嚢胞構造があり、潜在性ガマ腫が疑われる

### 3、組織像

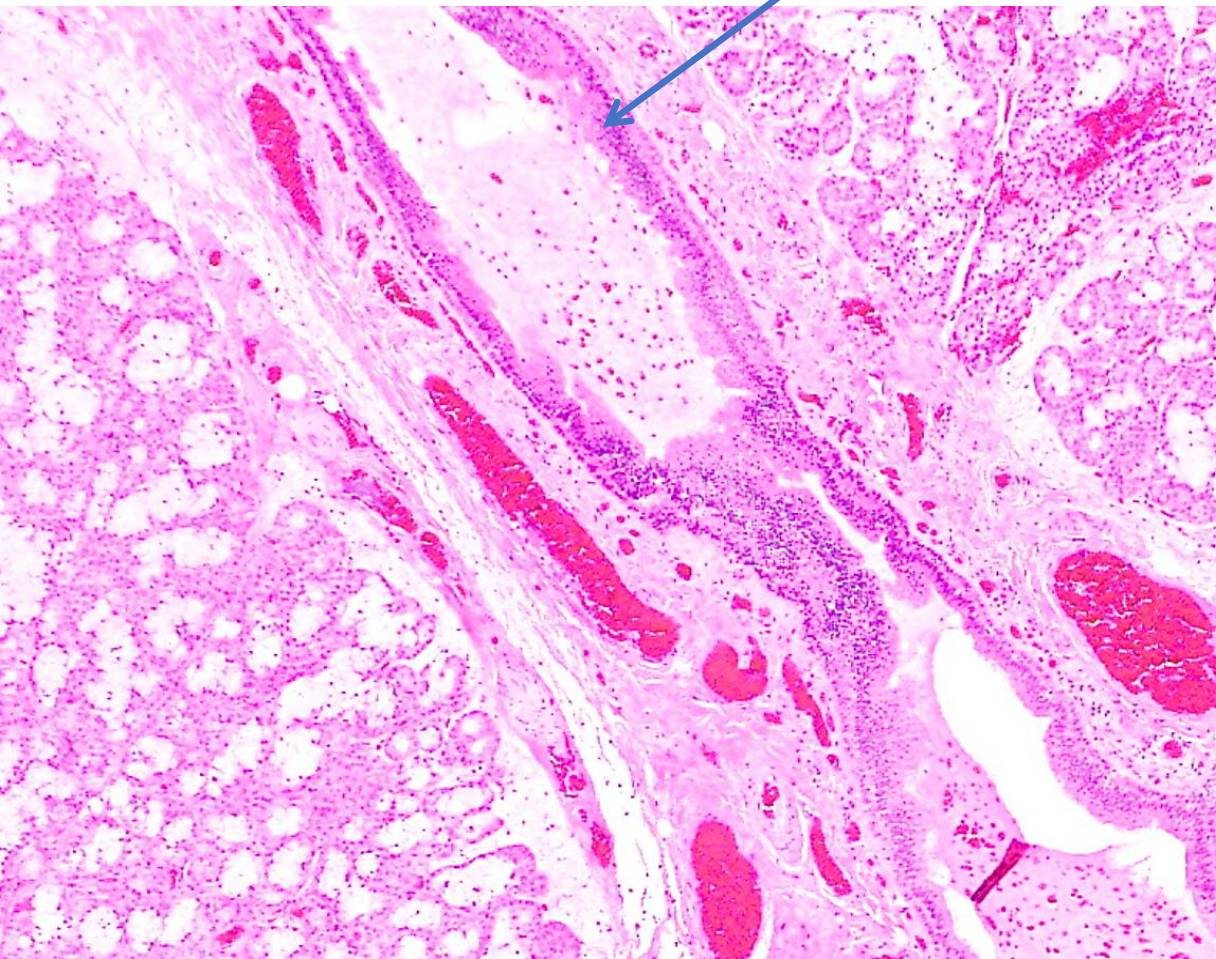
HE x4



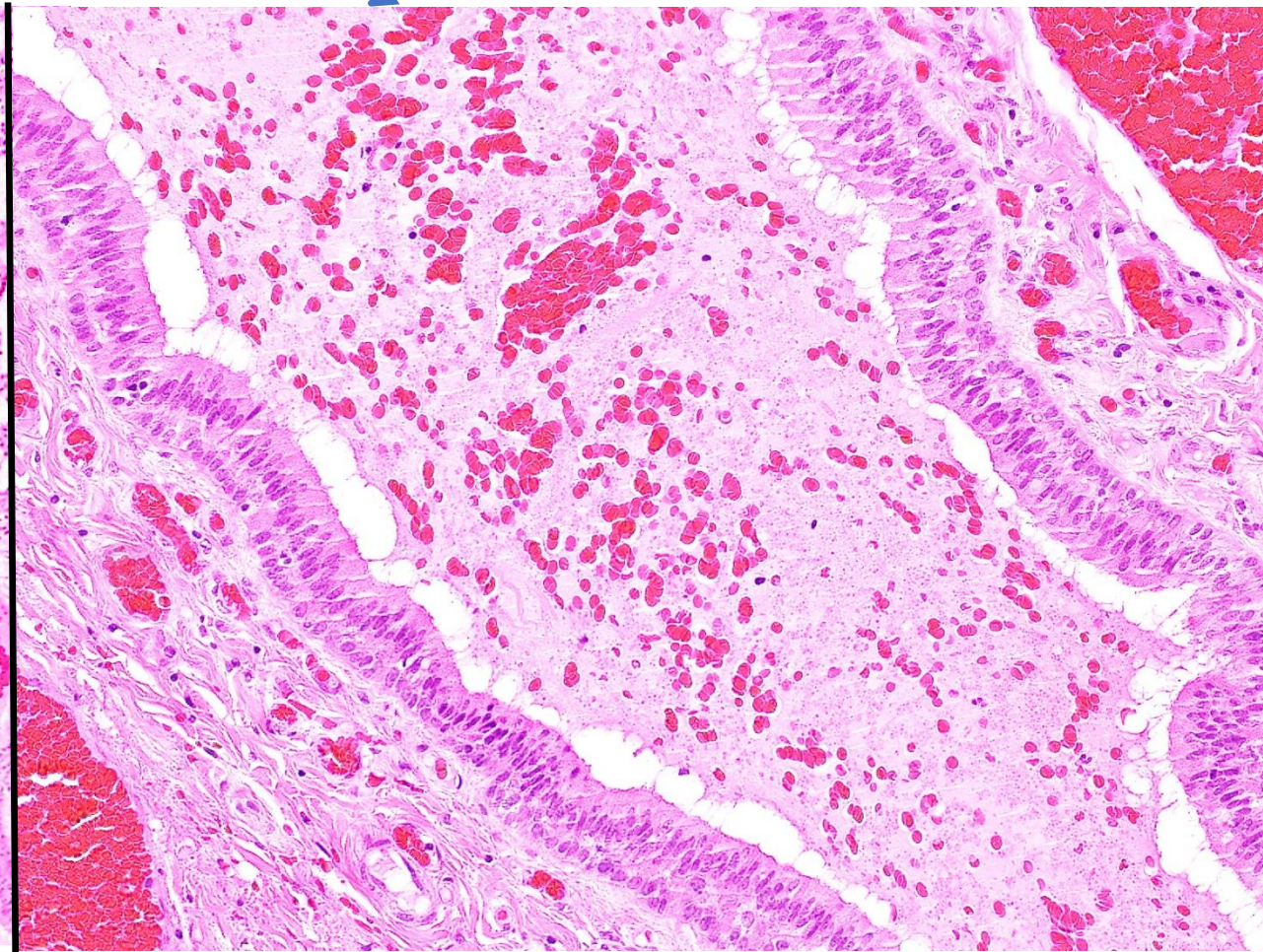
導管の拡張がみられ、嚢胞性病変を考えます。導管内に粘液を認めることから粘液嚢胞が疑われます。

### 3、組織像

導管内に粘液の貯留が確認  
できる



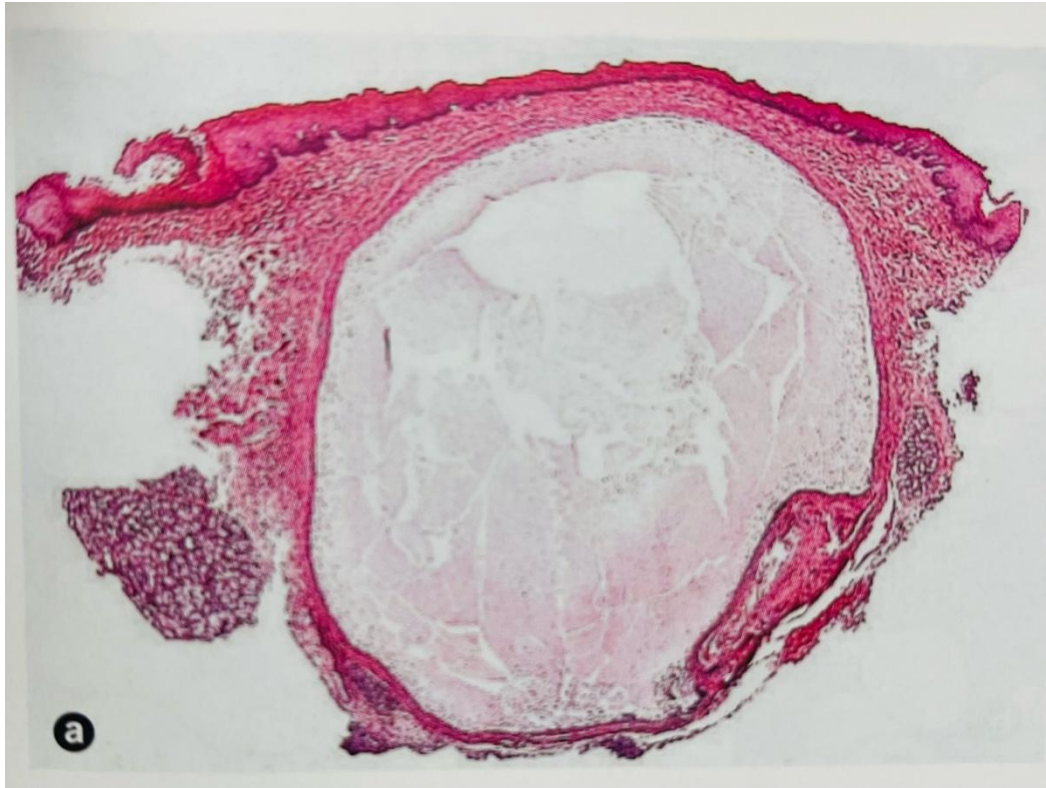
HE x10



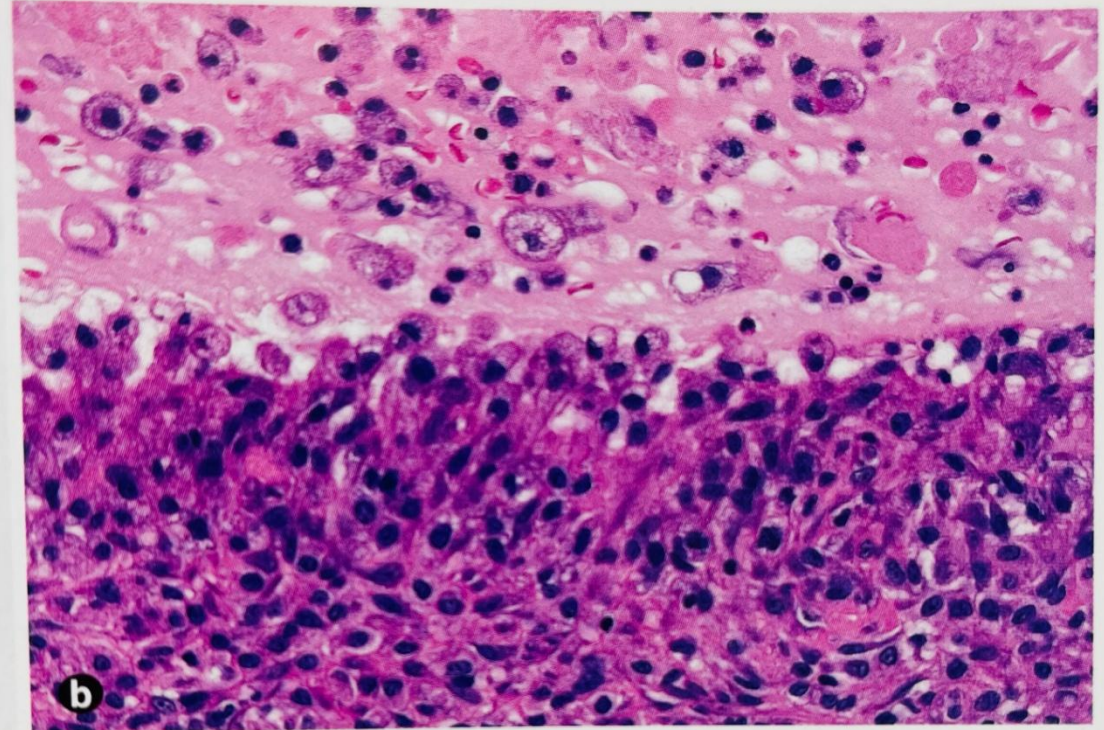
HE x20

\* 今回の症例では穿刺吸引施行(排液)した後、数日経過後に病変部位の切除が行われ、典型的な組織像が得られなかったため参考文献(外科病理学 第5版 p179)より粘液嚢胞の組織像を提示します。

## 粘液嚢胞



粘液上皮には粘液の貯留からなる単房性嚢胞形成がみられる。



嚢胞壁は炎症性肉芽組織から成り、図上方には粘液を貪食した組織球をみる。

今回得られた細胞像(粘液性背景、粘液を貪食した組織球、紡錘形細胞)は上記の参考文献と同様の所見がみられ、組織学的に出現した細胞の由来が確認できた症例であった。

## 選択肢におけるそれぞれの鑑別点

多形腺腫（紡錘形細胞型）：紡錘形筋上皮細胞の密な出現がみられるが、粘液は乏しい。

ワルチン腫瘍：嚢胞性腫瘤のため、吸引検体ではしばしば腫瘍細胞の採取量が少ないことがある。汚い背景とリンパ球や変性した円柱細胞の確認が診断の補助となる。

粘表皮癌：腫瘍細胞は単個または小集塊で出現し、中間細胞や扁平上皮成分が混在する。低悪性度粘表皮癌ではしばしば嚢胞状に拡張した腺管を認め、嚢胞内容のみが吸引されることがあり、粘液嚢胞との鑑別が困難な場合がある。鑑別ポイントとして、臨床経過や画像との対比が挙げられる。

#### 4、粘液嚢胞についてまとめ

粘液性の背景に、各種の炎症性細胞とともに粘液の貪食により泡沫状に腫大した細胞質を有する粘液貪食細胞が観察される。

粘液貪食細胞と粘表皮癌の粘液産生細胞の鑑別はときに困難であることから、粘液嚢胞の診断には臨床所見と肉眼所見を鑑み、粘液を貪食した粘液貪食細胞の有無を丁寧に観察する必要がある。

間質成分が多い場合や粘液貪食細胞が集簇性に出現した場合などは、唾液腺腫瘍との鑑別が必要であるため、慎重に診断すべきである。